

第4回滋賀県立高等学校在り方検討委員会の結果概要について

1 会議の日時等

開催日時 令和3年2月16日(火)9時30分～11時20分(大津合庁7A会議室)(Web会議)
出席委員 原 清治 大野裕己 徳久恭子 炭谷将史 坂口明德 高野裕子 樋口康之
稲葉芳子 権並裕子 中作佳正 今宿綾子 中山郁英 石野沙恵

◇これからの県立高等学校の在り方について
・中間まとめ(素案)

2 委員からの主な意見

■再編計画の総括について

①	彦根翔西館高校では、再編計画の中で学校の特色や特徴がかなり明確な形でスタートしたため、学校の運営がしやすく、入学した生徒の満足度も比較的高い。
②	「地域」という表現に少し引っかかる部分がある。地域住民が高校を支えるのか、県が市町もしくは市町教育委員会と連携するのか、いろいろなパターンがある。特に最終段落に、「地域との連携・協働における高校の魅力化策についても検討していく必要がある」とあるが、その魅力化政策を打ち出せるのは、地域住民からの声を行政側が拾って、もしくは高校側が拾ってということもあるので、もう少し丁寧に書いたほうが良いのではないか。
③	冊子全般につながるのだが、高校の再編計画となると、地域の問題が出てきた際には、市町及び市町教育委員会との連携が重要になってくる。これからの高校再編を考える場合、自治体間の連携なしに高校の活性化は難しいのではないか。そういう行政的な視点の部分も少し組み込んだ方が良いのではないか。
④	瀬田工業高校では、学校運営協議会の委員に小学校の校長先生や地元の自治会長も入っている。また、ボランティアサークルの生徒が子供たちのためにロケットを飛ばしたり、焼き芋焼き器をつくり、小学校に出前授業をしたりといったことも既に行っている。
⑤	日野町は日野高校と連携協定を締結しており、インターンシップやボランティア等、生徒は地域の中で活動してくれている。今後も高校生と地域課題とのマッチングをしていきたい。地域の将来像を描く中で、地元自治体と高校が情報共有や意見を出し合うことは、総合学科の高校における教育につながっている。
⑥	地域づくりはこれからの高校づくりに欠かせない視点であり、双方向の議論があるべき。

■滋賀の県立高校づくりのコンセプトについて

①	「『滋賀』に学び、『滋賀』で学ぶ」というコンセプトは素晴らしいと思う。ものづくりの滋賀であり、そういう県の魅力は教育資源になる。
②	企画作業部会では、「全県一区制度は滋賀の強味」という意見があったとのことだが、その通りだと思う。生徒にとって滋賀県全体から高校を選択することができるということと、地域で育てる。そのあたりのところがもう少し書かれていると良いのではないか。
③	全県一区制度を前提に普通科の特色化を考えていく必要がある。コンセプトの中に全県一区が前提ということをわかりやすく書き込むべき。
④	①「滋賀」に学ぶ、の4つ目の◎に生徒数減少への対応とあるが、生徒数減少は学びそのものではないので、その下の①と②を支える環境整備のところ、「人口変動に対応した学校づくり」として置く方が良いのではないか。
⑤	コンセプトに郷土愛に関する記述がないことが気になった。定住を促す教育など、「滋賀に住み続ける人材を育成する」というようなことがコンセプトに入ると良いのではないか。

■探究活動について

①	ほとんどが大学進学希望者の普通科の生徒達が、探究の時間を使って、中小企業までわざわざ見学に来ることがある。素晴らしい取組だと思う。ぜひ継続してほしい。
②	新しい学習指導要領では総合的な探究の時間が設けられており、全ての学校で探究に取り組んでいる。2月14日に探究的な学習の研究発表会をオンラインで開催した。普通科だけでなく、工業高校からも水質調査等の発表があった。そのような専門高校そして普通科が互いに探究の成果を発表し合う取組も行っており、充実、拡大が大切と考えている。
③	どこの学校を卒業したかよりも、何ができるか、学んだことを社会でどう生かすかということが大切であり、知識詰め込みではなく探究活動が非常に大事だと思う。探究活動を進めていく中で、産官学に加えて地域との連携は非常に大切。現地調査では高校が塾と連携しているという話を伺い、時代が変わってきたのだと感じた。
④	探究学習を通し、知ること、世界が広がっていくことの楽しさに気づくことは大事。そんな中、保護者は高校の当事者であり、地域住民としての当事者でもある。子どもを預けっぱなしや学校への要求ばかりではなく、教育に関与することができればかなり戦力になるのではないかと。中間まとめ素案の「地域」という文言の中には保護者も含まれるだろうが、どうかかわるかが重要。

■キャリア教育について

①	キャリア教育の充実や普通科の特色化は必要である。安曇川高校の総合学科にはロボティクス系列ができて良いと思う。教員や生徒が異なる学科の学校間を行き来するようなキャリア教育があると良いと思う。
②	学校の魅力化としては、滋賀らしい、高校生を支えるしくみとして、例えば、先生も学校間を行き来できるなど自由度を高めることも良い。
③	大学との連携について、県内大学だけでなく一定数が進学している京都の大学とも連携し、大学卒業後、滋賀に戻って住んでいただける、仕事をしていただけるというところまで考えてほしい。就職は県外でとなると地域の活性化ということにつながる。

■普通科の特色化について

①	普通科の特色化とあるが、普通であるのに特色を持つというのは言葉的に矛盾しているようでわかりにくい。普通科自体をなくして、例えば進学を目指すのであれば特進科とするのも一つの方法ではないか。県外に進学する生徒を滋賀に戻そうとすると、特進科という名前を広げて打ち出していくということも考えられる。
②	優秀な生徒を育てることは大事ではあるが、偏差値を上げるというのは作業であり、生徒の仕事ではないと思う。学校である限り、16ページの滋賀の教育大綱にある中江藤樹先生の致良知や雨森芳洲先生の異文化との交流等の近江の心はベースとすべきであり、学ぶ作業と、学校として何を指すのか、ということに分けて考えた方が良い。
③	普通科の特色化は理想だが、融通がきかないと、学びにくさにつながる。少なくとも学校内では、入学後の途中からの進路変更にも融通がきくような柔軟性が必要ではないか。
④	不登校にしない、させないしくみが重要。

■情報発信について

①	魅力の発信に関して、瀬田工業高校の例だが、30社ぐらいの企業の方の前で発表会をしている。そういった場合は生徒にとって成長の機会となるし、地域にとっては、学校の魅力を感じる機会になる。そういうことを通した魅力発信の方法もある。
②	総合学科の高校では課題研究に取り組んでおり、その発表会に県内や近畿の総合学科の高校を招待している。学びを発表することで生徒の自己肯定感が高まる。しかし、普通科はそうしたことが少なく、外に見えない。探究の科目についての相互の発表大会等が、子供達の身の回りで行われるようになると、子供たちも真剣に高校選びができるようになり、入学後の3年間もより充実したものになると思う。

③	情報の発信について、アンケートでは、高校の情報入手が家族や親戚が多い。情報に触れる機会の確保が大切。ICTを活用したりモートの相談会や高校のHPの充実が必要ではないか。写真などがあり、見やすく楽しさが伝わってくるようなHPにしていく必要がある。
④	中学校長会では、全県一区制度について賛成意見が多かった。ただ、北部の高校について、生徒数が減少しており、在り方を懸念する声もあった。特色をどうとらえるかが大切。特色については様々な発信方法があり、学校紹介ビデオをつくってメディアで発信していくなどの工夫が必要との意見もあった。

■教職員の育成、持続可能な推進体制の構築について

①	教職員の育成について、企業や大学との連携を進めようとするなら、社会経験をされた方の採用を増やすとか、教職員が企業で何年間か経験して戻ってくるというようなことも必要ではないか。
②	ICT活用やギガスクールも始まる。情報端末を使って授業ができる教員の養成も急務だと思う。ICTを使える教員の雇用も必要ではないか。
③	教員の働き方改革について、教員を支える、応援する手段は必要。人的に支える部分とICTを活用することで働き方改革ができないか。
④	教員の働き方改革について、学校内のイニシアチブを考えていくと、県の事務局組織とよくつながっている事務職員の方の位置付けや、イニシアチブの発揮について書き込みが少ないのではないかと。誰がイニシアチブを発揮できるかというところでは、もう少し盛り込む余地があるのではないかと。また検討できればと思う。
⑤	学校現場としては、25名から30名の少人数授業を実施すると非常にきめ細かく指導ができるという実感がある。少人数授業の実施は、取組の方向性に記載されている多くのことにつながっていく。予算等、様々な課題があると思うが、少人数授業を推進してほしい。
⑥	ICTを活用すると蓄積された学習履歴を分析することで、個々の生徒に最適な学習環境を提供していくことが可能となってくる。そうすると、教員の役割として、協働性をどうつくるのか、子どもの社会性をどう育てるのか学校に課せられたところであり、ICTの活用と関連して議論していく必要があるのではないかと。また、それは今回の在り方の案にはぜひ盛り込んでいかないといけないと思う。

■将来を見据えた整理について

①	公教育を担う公私双方が互いに尊重し、生徒減少の課題を共有し、協調する必要がある。公立私立の募集定員を策定する時の基本的な考え方、特に私学にどのような配慮をしているのか、また、公私比率がわかるような資料を基に議論したい。
②	学校規模に応じたメリット、デメリットについて、特にデメリットについては改善の方策を考えていく必要がある。平成20年度の在り方検討においてどのような整理がされたのか、その整理に基づいて、1学年2~3学級規模の学校と、1学年8~9学級規模の学校の取組の事例も知りたい。また、京都府の北部地域ではキャンパス構想というものがあるし、福井県は少人数学級を前面に押し出して学力を保障しているような部分もある。そういう他府県の取組についても資料が欲しい。
③	地域別の県内の小中学校の規模がわかると、小さい学校がどこにあるのか、もしマップが作成できるのであれば、どういうエリアにどんな目線に向けていけばよいのかがわかる。またそれは生徒数がどう推移していくかにもつながることで、高校の学級数をシュミレーションすることができるのではないかと。
④	高校の配置ということでは、県が県民に対して限られた資源でどのようにサービスしていくかという観点もあり、県が案を作成して示すという部分は抜くことはできないが、例えば、自治体レベルで高校と連携して改革していきたいという発意やイニシアチブがどのように認められ、今後活かされていくかといったところをもう少し詰めていくと良い。

■入学者選抜について

①	入試というものは、中学校を卒業した学力があることを測るような方向にすべきではないか。その際、落第ということが起こりうるが、落第は決して恥ずかしいことではないという共通理解が必要ではないか。
②	特色選抜について、導入当初の特色選抜の意味から変化してきているのではないか。大学入試も知識の詰め込みではなく、学んだことをどう生かすか等について問う問題が増えている中、高校入試ももっと斬新な改革が必要ではないか。
③	スポーツ・文化芸術推薦選抜に関して、特別な種目等について、中学校の教育課程外の活動をもって校長が推薦しなければならないことがある。この部分は更なる検討が必要ではないか。
④	入試制度に関しては、現行の滋賀県の入学者選抜の制度がどのような内容なのかわかる資料を準備してほしい。

■高等専門人材育成について

①	カの職業系専門学科・総合学科の特色化・高度化に関連して、滋賀県には高等専門学校が必要ではないか。「学生のため」を第一に、どこにどのようなものをつくれればよいのか、企画を練っていただきたい。また、県内にある職業能力開発短期大学校も高度化のために活用できるのではないか。
②	高等専門学校について、知事部局の議論と連携とあるが、高校と同じく中学校卒業生を対象とした学校で関連性がある。今後どのような議論や連携がなされていくのか。 → 現在知事部局を中心に検討しており、来年度予算で調査検討をしていくことについて議会に提案されている。県立高校の在り方検討でも特に産業教育の関係で非常に関連性があり、議論の状況や方向性などについて、検討委員会でも随時報告したい。

■その他

①	SDGsのマークが1つあるが、全体に流れているものを見ていると、まちづくりや健康など、もっといろんな観点があるのではないか。
②	SDGsについては、17番のパートナーシップで目標を達成しようという項目も加えたらどうか。
③	基本方針策定後の進め方で、必要に応じて地域別協議会を設置とあるが、必要に応じてとはどういう想定をしているのか。 → これからの議論になるところでもあるが、地域の中における高校の在り方について温度差がある部分もあり、全ての地域で同時に地域別協議会をつくるというのではなく、必要になったところからというイメージで、必要に応じてと記載している。
④	企画作業部会会議で、県立高校の校長先生に、自分の学校の将来についてどんなアイデアや構想等があるのか聞いてほしいというリクエストをしたがそのことについて進捗はどうなっているのか。 → 今回の中間まとめを示し、それぞれ各学校の考えるアイデアや構想を聞き取っていきたい。アイデア段階ということもあり、グループ化する等、出し方については工夫したい。
⑤	次回の5回目の検討委員会では、具体的な取組についての議論と将来を見据えた整理の4点についてさらに考えていきたい。